

地域コミュニティにおける諦め感の醸成
—宿毛を例に—

主査 浦野正樹教授

早稲田大学文化構想学部 社会構築論系

地域・都市論ゼミ

1T120968-5

松村 和佳菜

目次

| | |
|------------------------|----|
| 序章 | 3 |
| 第1章 地域の諸課題と社会背景 | |
| 1-1 過疎化の進行と地域のかかえる課題 | 5 |
| 1-2 戦後の地域社会の変容 | 5 |
| 1-3 地域の誇りやアイデンティティへの関心 | 8 |
| 2章 住民の意識への視線 | |
| 2-1 個人と地域をつなぐ視点としての希望学 | 10 |
| 2-2 釜石における希望学調査 | 10 |
| 2-3 希望の再生のために | 12 |
| 2-4 希望学の成果と課題 | 12 |
| 2-5 本論文における諦め感 | 13 |
| 3章 宿毛の暮らしと意識 | |
| 3-1 対象地選定の理由 | 14 |
| 3-2 地理的背景 | 15 |
| 3-3 歴史的背景 | 15 |
| 3-4 宿毛の暮らし | 18 |
| 3-5 アンケートから見る宿毛への期待 | 19 |
| 3-6 ヒアリングから見る宿毛の現状 | 21 |
| 4章 宿毛における諦め感 | |
| 4-1 地域の資源への諦め感 | 26 |
| 4-2 選択肢への諦め感 | 27 |
| 4-3 未来への諦め感 | 28 |
| 4-4 諦め感醸成のプロセス | 29 |
| 4-5 諦め感のもたらす影響 | 30 |
| 5章 諦め感を超えて | |
| 5-1 希望のジレンマの克服と希望の共有 | 33 |
| 5-2 宿毛らしさの再構築 | 34 |
| 5-3 ネットワークの活用 | 35 |

終章

1 全体のフロー図 37
2 本論文の意義 38

謝辞 39

序章

今日、地域社会は様々な課題を抱えている。少子高齢化の進行による小中学校の統廃合、医療や介護の諸課題、防災対策などの生活上の課題から、コミュニティや集落機能の低下など自治体や地域の存続に関わる課題まで、各地域が抱える課題は幅広く、かつ複雑である。そうした地域の課題に対する関心は高く、これまでも行政、住民、市民団体が多くの取り組みを展開してきた。しかし、同じような取り組みをしても、成功する事例もあれば、そうでない事例もある。地域の課題と手法があっているか、適切な支援があったのか、など細かい条件の差があることも考えられるが、それ以上に住民の意識が大切なのではないだろうか。

筆者は大学在学中に高知県宿毛市において、地域活性化の活動に取り組んだ。活動を通して、小学生からご高齢の方、市の職員さんや農業・漁業の関係者など、多くの方のお話を伺った。その中で、「宿毛にはなにもないから...」「なにをやってもどうせ...」というような発言を耳にすることがあった。筆者はこうした発言を聞いて、宿毛の人が地域の活性化や向上を諦めているような印象を受け、残念に思った。しかし、この感覚こそが地域の抱える課題の根底にある意識であるようにも感じた。どうせむり、という意識は地域の中にうずまく諦めの意識としてとらえられるのではないだろうか。

本論文は、そうした諦めの意識を「諦め感」としてとらえ、地域の諦め感の醸成の過程とその影響を考察する。ここでの地域の諦め感とは、地域を冷静に見て受け入れ、地域に対して希望や誇りが持てない状況にあり、(なにかを)断念することである、と定義する。広辞苑で断念と引くと、①「道理をさとる心。真理を諦観する心」、②「あきらめの気持ち」とある。日常的に使われる「断念する」という意味に加えて、「道理や真理を諦観する心」とあるように、置かれている状況を冷静に見つめて受け入れるという心理もあることを頭の隅におく。また、個人ひとりひとりが地域に対して持つだけでなく、地域に広がる意識としての感覚も視野に入れる。

さて、地域には様々な諦め感が存在しており、諦め感が地域の課題と連動している。諦めの意識を明らかにすることで、地域の課題の役に立てるのではないだろうか。そこで、本論文では、次の3点を明らかにすることを目的にする。1点目は、諦め感とはどのようなものであるか、である。宿毛における調査を分析して、諦め感を類型化する。2点目は、諦め感がうまれる過程である。社会情勢の変化、宿毛内外のロールモデルの分断、世代を超えた経験の連鎖の3点に注目して説明する。3点目は、諦め感と地域社会の課題の相関関係である。地域社会における諦め感の意味と、諦め感が地域社会に与える影響を考察する。

地域の諦め感を考察するうえで、本論文が注目するのは「希望学」の考え方である。希望学が個人の希望と社会の在り方は影響を及ぼし合っているという点に着目し、個人と社会を重ねて考えるという手法をとる。ここでは個人の意識を調査するために、高知県宿毛市でアンケートとヒアリングを実施する。そこで得られた結果を、社会的な背景や文脈とあわせて分析する。

本論文の構成としては、第 1 章で少子高齢化や過疎化を軸に地域が抱える課題やその背景、それに対する活動の変遷を取り上げて、地域を考える上での材料を提示する。第 2 章では、地域の住民の意識に迫る際の参考のために希望学を紹介し、本論文における諦め感を定義する。第 3 章では、高知県宿毛市で行った調査の概要とまとめを示す。第 4 章では、宿毛での調査の結果をもとに諦め感の類型化を試み、さらにその背景や影響について述べる。第 5 章では、諦め感と地域の諸課題の相互の関連についてまとめ、希望学で提唱された「希望の共有」「ローカル・アイデンティティの再構築」「地域内外のネットワーク」の 3 点に注目しながら、今後の地域の在り方を考えるヒントを探す。

第1章 地域の諸課題と社会背景

1-1 過疎化の進行と地域のかかえる課題

第1章では、地域社会が抱える課題について、過疎化の進行を軸に整理し、地域を考える材料を提示する。「限界集落」「地方消滅」という言葉が大きなインパクトを与えたが、地域社会は過疎化や少子高齢化などによる様々な課題を抱えている。

はじめに、地域住民の生活レベルにおける課題として、①生活の機能不全、②産業（特に農林漁業）の機能不全、③少子・高齢化問題の噴出、④集落維持の困難、などの課題が表れている（辻，2006，pp.97-128）。

同じような生活上の課題として、医療問題、介護問題、子どもの問題がある。急速に高齢化が進む地域において、こうした問題の担い手である非高齢者には、負担が重くのしかかる。また、他にも公共交通機関の廃止による交通手段の確保や、農産物の価格の低下などによるワーキングプアの問題などが生じている。過疎化が生じることによって、地域社会で暮らし続けていくための手段が奪われて地域社会から去らざるを得なくなる人々が増加し、過疎化がより進行していく（高橋・大坪，2000年，pp.29-34）。

また、小田切は、限界集落における過疎化のプロセスについて、「人の空洞化」「土地の空洞化」「むらの空洞化」の3つの空洞化が徐々に進むと指摘している。人の空洞化によって人口が減少し、集落機能の変化が顕在化する。その後も、地域に残る高齢者の死亡や他出により、人口の減少はさらに進む。そしてある段階になると、集落機能の急激かつ全面的な脆弱化が急テンポで発生する。この段階になると、住民の諦念（諦め感）が地域の中に急速に広がっていく。こうして誇りの空洞化が進んだ住民意識のことを「諦めの意識」とし、この諦めの意識が広がるのが限界集落化を加速させる。限界集落防止策として重要なことは、住民の諦観の広がりを防止し、除去することであると述べる。「そのために必要なことは、国や地方自治体が、その地域を強く「見つめる」「目配りをする」ことであり、逆に言えば、こうした仕組みが欠落していると、住民の心の中に諦め感が広がり、集落機能の低下が一気に臨界点に達する可能性がある。」（小田切，2009年，pp.49-50）

さらに、諦めの意識について、限界集落において、住民の思いが質的に変化するポイントであるというものである。農山村には、地域を次世代につなごうとする意識があり、強靱で強い持続性を持っていると述べたうえで、そうした思いが、災害などのインパクトによって、「諦め」に変わるポイントがあると説明する。このポイントを「臨界点」という言葉で表し、「「まだなんとかやっつけていける」という集落の多数の住民の基本的な思いが、「やはり、もうだめだ」と質的に変化するクリティカルポイントであろう。」としている（小田切，2014年，pp.41-43）。

近年、増田レポートが発表され、多くの自治体に衝撃を与えた。小田切は増田レポートに対しての社会の反応を、「農村たたみ論」「制度リセット論」「あきらめ論」の3つに分けて論じている。「農村たたみ論」と「制度リセット論」は、中央省庁や行政が、市町村が消滅することを必然のものとして、農村をたたむ方向性の議論や、これを機に制度を変える

議論（道州制の導入への期待）などを指している。「あきらめ論」とは、「「地方消滅」という名指しを受けた地域サイドに生まれている「どうせ消滅するなら、諦めよう」という雰囲気である」とし、行政関係者が住民の「どうせこの街はなくなるんでしょう」という自虐的な態度に疲れを感じているというエピソードとともに紹介している（小田切，2014年，pp.12）。

こうした研究からも分かるように、過疎化の進行は地域社会に様々な課題を生み出している。それらの課題は、地域の産業の機能不全、医療・介護の問題など生活に直結するものである。不安に感じた人や、医療・介護が問題で生活できなくなってしまう人が流出してしまう原因になる。さらに小田切が「誇りの空洞化」と「諦めの意識」という言葉を使って説明したように、地域での生活やコミュニティが成り立たなくなることによって、さらなる過疎化を呼び起こしてしまう。

1-2 戦後の地域社会の変容

1-1 で述べた地域の諸課題は、戦後の社会変化に起因する。第二次世界大戦後、社会の変化に伴い、地域社会は大きな変容を迫られた。ここでは3つの変化を挙げて紹介する。

1つ目の変化として、農村から都市部への人口流動が挙げられる。大久保・中西は、農村社会の変化について以下のように述べている。第二次世界大戦後、農地改革により、「「むら」の構成員によって共同で耕地などの生産基盤を保全し、共同的な色彩を残した形での農業の労働力調整を行うとともに、生活上の共同関係を有した戦後段階での共同的な組織」が作られた。これは、戦後の半封建的な社会関係から解放された共同生活組織であり、日本の「むら」社会の原型となった。生活においても共同関係を有している点に重きが置かれた。1950年代半ばから高度経済成長が始まると、工業分野の大量生産などによる都市への労働力の吸収が起こった。さらに、消費市場の拡大に伴って、農村部でも消費財やサービスを手に入れるための所得獲得に迫られるようになった。大都市への人口流出や都市的生活様式の浸透は、農村社会の基盤であった農地や労働力に影響を与え、農家兼業化、混住化、過疎化をひきおこしていった（大久保・中西，2006年，pp.6-11）。

戦後の地域社会の変化の2つ目に、農村と都市の地域格差の拡大が挙げられる。小内は、高度経済成長期における工業化が地域不均等発展と地域格差を推し進めたとする。土地や気候などの制約が少ない工業は、一般的に農業よりも生産性が高く、農工間の不均等発展が進んだと述べる。農村と都市の地域格差の拡大は、農村から都市への人口移動を生み出すとともに、農業の「近代化」を促した。これによって、農家労働力の他産業への排出や離農がますます進み、結果として、農村の過疎と都市の過密化をもたらした。工業化の勢いが衰えたのち、1980年代に入っても、過疎地域からは人口流出が続き、東京一極集中の問題に注目されるようになった（小内，2006年，pp.99-101）。

こうした視点に加えて、高橋・大坪は、農家と消費者が直接かかわることになったことによる、都市と地域の支配の関係性の強化が生じているとも述べる。地域社会内部の共同

性が希薄化し、農家自身の自家存続が重要視されるようになると、農村住民は地域内部のみではなく、外部ともつながるようになる。しかし、農村住民と都市住民との間で、ムラに対する意識のズレが依然として存在することを挙げる。さらに、農産物だけでなく、農村の生活空間までもが「商品化」され、「消費」されているという研究を取り上げ¹、これまで以上に、都市が農村を支配する図式が強くなっている、と述べている（高橋・大坪，2000年，33-34）。

3つ目の変化として、地域内部の人間関係の質の変化が挙げられる。大久保・中西は、農家兼業化、混住化、過疎化が、地域社会の共同性を希薄化させていったと述べる。兼業化によって、等質な農業生産に立脚した共同体的な労働関係や「むら仕事」のような共同作業は変質し、社会的なまとまりを脆弱化することになった。また同じ時期に引き起こされた混住化は、都市住民と地域住民の間のコンフリクトを指し、地域に対しての関心の温度差や地域規範の攪乱から地域社会の秩序を変質させた。1960年頃からの急激な人口の流出は、農村社会の機能を弱体化させる。生活を補完する種々の共同活動が希薄化し、生活の利便性が著しく後退することとなった。こうした3つの現象を受けて、地域の「むら」的的社会関係が変化し、「生産関係に基づくものは希薄化し、本来、地域に共同居住することを契機とする社会関係「共生社会性」が、農業生産にかかわる物的基盤の変化とは相対的に独立して顕在化する。」と説明している。（大久保・中西，2006年，pp.6-11）

高橋・大坪は、かつてのムラのはたらきは、生活の互助関係であったが、現在は「それぞれの「家」の利害関係のなかで、それぞれの「家」の利害関係が一致する範囲において、ムラ的なつながりが重視されていていっている」と述べ、「そこには明確な農家自身の自家存続のための「戦略」が内在している」と説明する。（高橋・大坪，2000年，pp.32-33）
これらのことから、生活面での機能の低下だけでなく、地域のまとまりの弱体化が起きていることがわかる。さらにその結果として、地域社会においても個人ひとりひとりの利害が重視される傾向が生じてきたといえる。

過疎に至るまでのプロセスに着目すると、過疎化の進行の過程において、地域社会の解体が起きていることが明らかになる。1950年頃から、高度経済成長による労働力の吸収や、市場経済の拡大による現金収入の必要性の高まりなどから、農村から都市へ大規模な人口流出が進んだ。兼業化、混住化、過疎化を経て、従来の地域社会の秩序が揺らぎ、地域社会に根付いていた共同性が解体されることになった。その結果、1-1で挙げたように農産物の機能不全や、医療や介護の問題などの住民の生活上の課題が生じ、そうした課題がさらなる過疎化を促している。

地域の諦め感を考える上で、ここでまとめた戦後の社会変動とそれによる地域の変容を参考にする。そのうえで、この論文で注目したいのは、地域社会の共同性の希薄化の結果、個人と地域の利害関係がイコールで結ばれなくなったことである。個人の利害（や希望）と地域の利害（や希望）の不一致が起こることで、地域の課題や目標を共有することが難

¹日本村落研究学会編『年報村落社会研究 41 消費される農村』，2005

しくなり、諦め感が生み出される状況につながっていくのではないだろうか。

1-3 地域の誇りやアイデンティティへの関心

以上のような地域の課題に対して、対策を講じる動きや住民自身の活動も広がっている。大久保・中西は、農村社会再生の取り組みの変遷を次のように説明する。初期の地域活性化の動きとして、1970年代の「過疎を逆手にとる会」や大山町農協の住民主導の内発的な取り組みを挙げるが、これらはあくまで点的な存在にとどまったとする。その後、全国的な広がりを見せるようになったのは、1980年代からで、大分県の「一村一品運動」など、行政に主導されながら農産物の差別化を図るものが展開されていった。1980年代後半からは、補助事業の整備にともなった「イベント」が各地で行われるようになる。しかし、その頃、リゾート法が制定されて、農村はリゾート開発の波に飲み込まれていく。バブル崩壊後、財政困難に至る自治体も多い。その後は、草の根的な地域活性化の手法が求められ、行政と団体、地域住民が連携して取り組む地域づくり活動が目立つようになる。今日は、地域資源の活用を基本にした、住民の手による地域アイデンティティの確立を目指す段階に至っている（大久保・中西，2006年，pp.11-13）。

地域再生の1つの方法として「地元学」という考え方もある。地元学とは、「限定した地域において、外的な社会経済的変化への対応の中で、さまざまな課題を解決しながら住民の意識を向上させ、主体性をもって地域を運営していく思想」である。また、「住んでいる地域の良さを再発見し、地元の優れた条件や恵まれた側面を把握してそれをいかに使って自主性および創造性を確立していく」。その実現のためには、人々の行動力を引き出すためのわかりやすい「ビジョン」が必要であり、住んでいるエリアの自然や環境、歴史や文化を活用していこうという「ビジョン」は、脈々と伝承している心情に訴えていくことができる（下平尾，2006年，pp.7-12）。

結城によると、地元学は地元の暮らしに寄り添う具体の学であり、その土地の人々の声に耳を傾け、そこに生きる人びとに寄り添って展開されるものである。急速に都市化が進んだ仙台に飲み込まれそうになっていた仙台市青葉区の事例では、地元の人の話を引き出し、その地域の暮らしの断片を記録していくことで、住民たちが地域の営みと絆を発見し、自分たちの地元をつくりあげるための活動を始めている。地元学の目指すところは、同じ地域を生きる人々と関係を再構築するために、それぞれの地元の資源とそれを活かす知恵と技術と哲学を学ぶこと、そしてその力を合流させ自分たちの生きやすい場所に整えなおすことである。企業社会や都市が失ったものを補う可能性をもっているのが、農山漁村であり、都市の基準だけで農山漁村を判断するのではなく、文化、コミュニティ、自然風土、生き方と哲学の存在と魅力を子どもたちに伝えていくべきである（結城，2009年，pp.13-39）。

ここから分かるように地元学では、住民が主体的に活動することが重要視される。ないものを嘆くのではなく、住民の記憶の中にある地域の暮らしを紡ぎ出して記録し、地域にある自然や歴史、文化に触れ、その価値を発見することが第一歩となる。

住民のアイデンティティや「誇り」など、地域への意識への関心も高い。白石は島根の中山間地域と島嶼地域における地域力の構造分析を行い、「誇り」が定住意識に優位に影響を与えていること、「互酬性²」が「誇り」、「充実感」に優位に相関があること、「誇り」と「充実感」に相関関係があることを明らかにし、今後の地域社会の在り方を考えるうえでの「誇り」の重要性を説いている（白石，2013年，pp.44-45）。このように、地域の課題を考える際に、住民が地域に対して抱えているイメージや思い、誇りなどに注目することへの関心が高まっている。

² 白石は、「地域力」の構成要素を、ソーシャルキャピタル（信頼、互酬性、参加）、地域での暮らしへの「満足度」、地域に対する「誇り」の5つと捉え、「地域力」が定住意識に与える影響について分析している。

第2章 住民の意識への視線

2-1 個人と地域をつなぐ視点としての希望学

この章では、住民の意識を扱うための参考として、希望学の取り組みについて紹介する。希望学とは、東京大学社会科学研究所が立ち上げた新しい学問であり、ホームページには、「希望学とは、社会全般にとっての根本的な課題としての希望について、その社会的意味を明らかにすることを目的に、従来の学問的枠組みを越えるかたちで、東京大学社会科学研究所を基盤として2005年度よりはじめられた新しい学問」であると説明されている（東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトホームページ）。

社会の問題を考える際にかつては前提だった希望が失われつつあることを指摘し、希望の喪失が社会の閉塞感の根源にあることを問題意識として掲げている。「社会において個人が形成する希望とはそもそも何なのか」「社会が個人の持つ希望にどのような影響を及ぼすか」「個人の形成する希望が社会状況をどのように想定するか」という3つの問いを用意して、希望という視点から社会の問題を多角的に考えている（東大社研・玄田・中村，2009，pp. x v）。

宇野は、「個人の希望」と「社会の希望」との関係性をとらえるために、リベラリズム論を取り上げて、その主張を整理したうえで、「リベラリズムは、希望を個人の問題として回避するのではなく、むしろ積極的に多様な生き方を可能にする社会の在り方を論じなければならぬ」と述べる。また、このように「希望の共有」、あるいは「社会的な希望」を考えなければならない理由として、現代が「個人化」によって特徴づけられる時代である点を挙げている。様々な社会的・経済的な背景によって起きた事柄が、個人の希望の問題に還元される傾向があることを指摘し、そのことが逆に「個人の希望を改めて検討することで、そこに顕在的・潜在的に反映される社会の多くのメカニズムを明らかにできることを意味する」と説明している。さらに、希望と社会のつながりについて、「個人一人ひとりの希望が、他者に共有された社会的な希望となり、また一人ひとりが希望を抱くことを可能にする社会的条件の模索とつながる」と述べて、これが希望を社会科学の対象とする最大の理由であるとする（宇野，2009，pp.281-288）。

このように、希望学は個人の心理的な問題とされていた希望を、社会との関係の中で読み解いていく考え方を提供している。地域住民の意識を扱うにあたって、希望学のこうした考え方を取り入れる。

2-2 釜石における希望学調査

ここで希望学の中でも、釜石という地域に着目した研究を取り上げる。希望学釜石調査では、2007年までに釜石に存続した4つの高等学校の同窓会員に対して、高等学校卒業後のライフコースを問う同窓会調査を行っている。1956年3月卒から1995年の3月卒までの40年間からおよそ1万人弱の同窓会員を対象とし、高等学校を卒業してからの職業や家族形成、生活意識、地域コミュニティとの関わり、地域移動などを調査した（永井，2009

年, pp.150)。

西野は、「人口減少地域においては、個人の希望と地域の希望が矛盾と捉えられてしまう可能性が高い。しかし、移動と定住という視点から見た時、個人の希望と地域の希望は常に反目する関係であったらうか。ときには合致し、ときには矛盾する二つの希望のベクトルが世代ごとにどのように揺れ動いてきたのかを、本章は釜石市内の高校卒業者の地域移動経歴を丁寧にみていくことで検証していく。釜石側の状況、大都市側の状況、学歴、移動先、職業などが複雑に絡み合っ、二つのベクトルをめぐる独自の状況が、それぞれの世代で作られてきたのである」と述べ、同窓会調査を次のように分析している（西野, 2009 年, pp.166）。

1935 年～1944 年、1945 年～1954 年、1955 年～1973 年の 3 つに分けて、地域移動とライフコースについて、高校卒業時の釜石の状況、高校進学率、初職移動・進学移動先、初職の特徴、U ターン移動の特徴を丁寧に分析している。さらに、その分析から、個人の希望と地域の希望の仮説をたてている。例えば、1935 年～1944 年生まれの男性は、製鉄所が全盛期の頃に高校を卒業している。高校の進学率は 5 割前後で、高卒者の 6 割強が釜石で初職につき、大学進学者の 7 割が関東に進学している。仕事の特徴としては、釜石製鉄所をはじめ、高卒者もホワイトカラー・長期的に安定職に就く余地があった。この頃について、多くの若い人材が地元に残ったため、個人と地域の希望は乖離するとの意識は弱かったと予想している。次の世代である 1945 年～1955 年生まれの男性が高校を卒業する頃は、釜石製鉄所の縮小が始まった時期に重なり、人口の社会減が最大であった。釜石を離れる若者が多かったが、若者が無事に市外に定着できることで、市内に失業者があふれずに済んだと言えるため、釜石を離れる個々の若者の希望を後押しすることが、地域の希望と一致すると予想する。（西野, 2009 年, pp.175-190）

また、釜石に残った人と釜石を離れた人の釜石への希望のイメージの違いについて言及している。1935 年から 1944 年生まれの男性の場合、釜石への誇りとして「近代製鉄発祥の地」「日本経済を支えた地」の回答は、釜石在住の人にも釜石外に住んでいる人にも多いに対して、釜石の将来の希望の回答では、両者に違いがある。釜石外に住んでいる人は、企業誘致、観光業・漁業の振興による経済振興策を書き込む人が多く、「人口増」を希望している。それに対して、釜石在住者や若者は、「若者が働ける職場を」「人口減少に歯止めを」と書く人が多い。これについて、釜石を離れた人にとっては、釜石の情報が少なく比較的气軽に成長志向を語るのに対して、釜石在住の人が、縮小する釜石を生き抜いた経験から、「人口の増加」を望めないという実感を持ってきたためだと予想する。この結果に対するそれぞれの気持ちについて、釜石在住者が人口増を諦めたわけではなく、現実の厳しさを知ったうえで、現実に静かに抗う気持ちを宿しているからこそであると述べる。また、釜石を離れた人にとっても単純ではなく、準当事者ともいえるような割り切れなさを持っているとして、「彼らが故郷を愛したいという気持ちは、釜石を離れたうしろめたさと表裏一体かもしれない。」としている。そして、釜石在住者の静かな抗いと、釜石を離れた人が

釜石に寄せ続ける関心が重ねられる「表象の空間」であり続ける限り、なんらかのかたちで努力と工夫が重ね続けられるだろう、と結んでいる（西野，2009年，pp.191-195）。

この研究で西野は、「地域の希望」と「個人の希望」という二つのベクトルがあることを示し、世代ごとに二つの希望のベクトルがどのように揺れていったかに迫ろうとした。筆者は、この揺らぎの延長線上に二つの希望がおりあわないことへの「諦め感」があるのではないかと仮説をたてる。ここで使われた「地域の希望」と「個人の希望」があるという点と、そうした二つのベクトルが矛盾や重なり合いが世代や社会情勢に影響を受けているという点をこの研究での分析の際に参考にし、地域住民の気持ちと社会情勢の関係性に迫るヒントにしたい。

2-3 希望の再生のために

希望学・釜石調査を通して、「希望の共有」「ローカル・アイデンティティの再構築」「地域内外のネットワークの形成」の3つが地域における希望の再生にとって不可欠であるという仮説を打ち出した（東大社研・中村・玄田，2009年，pp. x v）。

中村は、釜石の調査を統括し、以上の3点についてまとめなおしている。そこではまず、釜石のネットワークについて、製鉄所を中心とした企業城下町であったことから、製鉄所や企業を軸にした社会関係を構築してきたと述べる。その影響力が縮小した後に、ネットワークや社会関係が構築されず、社会関係が希薄化していると説明する。そのために人々が分立した状況であることを述べ、住民間のネットワークの形成と組織化が地域振興の担い手の創出という意味で、不可欠の要素であるとする。また、こうしたネットワークの形成にとって、「希望の共有」という問題が重要な意味をもつことが釜石の調査の過程で明らかになってきたと述べる。地域社会が一定の自意識（local identity）と将来構想（「希望」）を持って、それに向けて合意を形成することは、地域内での様々なネットワークを有機的に結合し、地域の活性化、再生への道を拓くであろう」とまとめている。（中村，2008年，pp. 25-29）

2-4 希望学の成果と課題

ここで、希望学の成果と課題をまとめる。希望学が残した成果を3つ挙げたい。1つ目の成果は、個人の内面と社会をつなぐ視点を提示したことである。従来、希望は心理学の分野であるとして、個人の問題ととらわれがちだった。宇野が指摘したように、東大社研が行った研究は、個人の希望と社会の在り方を関連付けて考えることを重要視した。こうした研究が従来の学問の枠組みを越えて、分野横断的に行われたことで、個人と社会を重ねて考えるという手法を生み出すとともに、新しい論点を残すこととなった。

2つ目成果は、希望の再生に向けて必要なことを洗い出した点である。釜石での希望学プロジェクトの総括として、地域の希望の再生に向けて必要なことは「希望の共有」「ローカル・アイデンティティの再構築」「地域内外のネットワークの形成」であるとまとめた。

この3つの考え方は、今後の地域を考える際の良き指針となる。

3つ目の成果は、地域の人が自分の地域について考えるきっかけを生み出した点にある。釜石調査の座談会の中で、住民の間にわたしたちのまちってなんだろうと模索する動きがブームになった、と紹介されている。中間報告会で釜石の希望やアイデンティティの話題を受けて、産業遺産の活動に取り組んだり、名古屋製鉄所に行った人と協定を結んだりというような動きがあったそうだ。こうした反響からは、住民にも意識の変化があったことが伺える。住民の話を深く掘り下げて聞いたことに加えて、地元の雑誌に連載したり、シンポジウムを開いたりしたことで、地域を巻き込んだ研究となった（竹村ほか、2009年、pp.321）。

このように希望学プロジェクトは、個人と地域をつなぐ研究としての成果を残している。ここでの成果は今後より豊かな地域をつくっていく際のヒントとなるだろう。一方で、希望を持っていない人に対する考察が不足しているようにも思われる。今起きている地域社会の課題を考えるためには、現実の地域に希望を持っていない人に着目し、希望よりもむしろ諦め感の仕組みを明らかにすることが求められるのではないだろうか。例えば、地域に誇りを持っていない中高生に対して、どのようなサポートが必要なのかを考える時に、地域のどこに諦めを感じているのか、どのようにその考えに至ったのか、そしてそこから地域のどんな課題が見えてくるのか、というような迫り方ができるのではないだろうか。個々の諦め感に注目することで、地域の課題や地域社会全体に渦巻く諦め感に迫ることができるのではないだろうか。そうすることで、地域の課題に迫れるのではないだろうか。

2-5 諦め感

ここで、本論文における諦め感の定義づけをしておきたい。広辞苑で諦念を引くと、諦念とは①「道理をさとる心。真理を諦観する心」、②「あきらめの気持ち」とある。日常的に使われる「断念する」という意味に加えて、「道理や真理を諦観する心」とあるように、置かれている状況を冷静に見つめて受け入れるという心理もあることを頭の隅におく。

第1節で紹介した希望学では、「かつては前提だった希望」が今は失われつつあり、閉塞感の根源に希望の喪失が存在する、と述べられている。また、社会学者で限界集落の研究をしている小田切・は、過疎化の進行の過程の中に、諦めの意識があると述べている。限界集落化の進行の過程で「人の空洞化」「土地の空洞化」「むらの空洞化」の3つの空洞化が起こり、その後「誇りの空洞化」が起きる。誇りの空洞化が進んだ状態を諦めの意識が広がった状態であると表現し、この時点から一気に集落機能やコミュニティの崩壊が加速することを説明している。こうした見解から、諦め感を説明する要素の一つは希望や誇りが持てない状態という言葉当てはめられる。本論文では、地域の諦め感とは、地域を冷静に見て受け入れ、地域に対して希望や誇りが持てない状況にあり、（なにかを）断念することである、と定義する。

3章 宿毛のくらし

3-1 対象地選定の理由

第3章では、研究対象地として取あげる宿毛の地理、歴史、現在の人々のくらしについてまとめたうえで、宿毛におけるヒアリングの結果を述べる。はじめに、この地域を選定する理由を3つ挙げる。1つ目は宿毛が条件不利地域であること、2つ目が進路選択のタイミングが早いことと、3つ目が地域の偉人の教育に力を入れている点である。

1点目の条件不利地域については、物理的な距離による様々な不利な状況について説明を加える。宿毛は高知市内から車で2時間半を要する。車で移動すると、大阪までは7時間ほどかかる。最短で大阪や東京に向かうには、高知もしくは松山まで2時間半かけて行き、そこから飛行機に乗る。このように、なにををするにも時間がかかることは、物理的に遠いということだけでなく、情報や機会の面で不利な条件に置かれる。こうした地理的な条件が、情報や機会の限定につながる点が諦め感の背景に存在しているのではないだろうか。

2つ目の進路選択のタイミングが早いことを意味している。大学に進学するためには、宿毛外の高校進学を選択するケースも多い。市外の高校に進学することを決めた人は、その後高知や大阪、東京の大学へ進学し、そのまま外で就職することが多い。それに対して、高校進学時に市内に残る選択をした人は、高校卒業後に専門学校に進学し、宿毛の周辺で働くことが多い。このように、宿毛で生活続けるか、離れるかという選択は高校進学の時点で決まり、そこでの進路選択が将来の生き方の方向性を決める。そのため、大学に進学してほしいと願う親は高校進学時から宿毛外に進学させる。中にはいい大学に通うため、中学校進学のタイミングで宿毛を離れる人もいる。しかし、早くから地域を離れると、地域内にネットワークを築くことが難しく、地域について語る機会も少ない。そのため、地域に対する誇りやアイデンティティを持つことも難しく、Uターンしてきたり、宿毛を離れたあとに地域の活性化に関わったりすることを難しくしているのではないだろうか。

その結果、地域を離れる人と残る人の分断が起こる可能性があるのではないか。市内に大学がなく、大学進学を考えるならば地域を離れて生活しなければならないという条件が、進路選択のタイミングが早いことと、その後戻ってくることのハードルが高くなることにつながっている可能性がある点が、宿毛を研究対象地とする理由の2点目である。

3つ目は地域の偉人の勉強に力を入れている点である。宿毛では、郷土教育の1つとして、「宿毛の21人」の勉強に力を入れている。宿毛の21人とは、小野梓や竹内明太郎をはじめ、幕末から明治維新にかけて活躍した人物21人のことである。小学生は、宿毛出身の偉人たちについて学び、それを受けて自分の将来に対する夢や進路などの作文を書いている。宿毛の偉人について学ばせる教育は、地域の外にでて活躍することを後押ししているように見える。その一方で、地域からの若者の流出を嘆く声もある。「吉田茂を代表に、昔から宿毛出身の偉人は宿毛のための政策をやらなかった」という皮肉と一緒に、宿毛を出たやつは地域に戻ってこない、というお話を聞くこともある。このように地域からの若者の流出を嘆く声と地域から離れて活躍することの後押しをすることの矛盾はどのように捉える

べきであろうか。地域の偉人の教育に力を入れている点がこの矛盾の象徴のように思える。以上の3点の仮設を踏まえて、宿毛を研究対象地として選定し、調査を行う。

3-2 地理的な背景

研究対象地選定の理由の一つにもあげたように、宿毛は高知県の最西端に位置する。高知市や松山市から、車もしくは鉄道、バスを利用すると2時間半程度で宿毛に到着する。また、大分の佐伯にはフェリーが出ており、4時間ほどで行き来することができる。宿毛湾は大型の旅客船が入港できる深さを誇っており、豪華客船「飛鳥Ⅱ」や「にっぽん丸」が寄港地となっている。沖合いの沖の島周辺の海は透明度も高く、珊瑚や熱帯魚が豊富に見られ、全国有数のダイビングスポットとなっている。



写真1 宿毛市図

※宿毛市ホームページより

海および山に囲まれ、自然環境に恵まれた地形であることから、昔から農林水産業が盛んである。豊後水道に面した宿毛湾は、魚のゆりかご・天然の養殖場、といわれるほど魚種の豊富な海で、種類が豊富で味の良い魚がとれる。その環境を活かして、養殖業や沿岸漁業を中心に発展してきた。漁業が盛んな集落は特に、コミュニティの意識が強く、お祭りや地域の文化が残っている。農業は、オクラやブロッコリーなどの露地野菜、ミョウガなどのハウス野菜が盛んなほか、斜面を利用した柑橘の栽培がおこなわれている。

3-3 歴史的背景

歴史的に見ると、宿毛は早くから文明が開けた地とされている。宿毛の町はずれには、国の史蹟に指定されている宿毛貝塚があり、3,4000年の昔、この地に文化が開けていたことがわかり、平田には県下最古最大の前方後円墳もある。旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代を通して、宿毛湾を経て文化が土佐に入っている。江戸時代には、土佐藩の家老である山内氏の城下町として発展した。明治時代には、早稲田の建学の母である小野梓をはじめ、林有造や竹内明太郎など明治維新に活躍した人材を多く輩出している。これは、山内家が教育に力を入れたためだと言われている。この頃活躍した、林有造邸、小野梓の墓、講授館跡などは今も残されており、宿毛のまちを歩くと偉人にゆかりのある石碑なども見ることができる。また、彼らの子孫や後継者と宿毛は、現在に至るまで強いつながりがある。小野梓が建学に携わった早稲田大学とは、いまでも強いつながりがある。

現在の宿毛市は1954年に、宿毛町、橋上村、山奈村、平田村、小筑紫町、沖の島村の二町四村が合併して誕生している。

〈農民のくらし〉

多くの偉人を輩出した宿毛であるが、農民や漁師の生活の変容にも注目したい。宿毛市史によると、明治時代の農村は、衣食住にわたり自給自足を基本とし、米や野菜、肥料や燃料も自家生産であった。衣服も自分の家で綿を作り機織り機で農閑期に織る人が多く、仕事着から普段着、布団地、晴着、娘の嫁入衣装までほとんどの家が自家製であった。副食としては、味噌と漬物が重要視されていたので、味噌と漬物は大ていの家で作られた。醤油も普段は購入することなく味噌と同様に自家製のものを利用した。野菜も自家で栽培したので副食を買うことが少なく、魚もだしとして煮干魚を買うくらいであまり買うことがなかった。買うにしても物々交換で現金支出はほとんどなかった（宿毛市史編纂委員会，1997年，pp. 1044-1045）。

その後、明治の終りから大正にかけて資本主義経済がだんだん農村にも浸透し、農家での衣料生産もだんだん下火となった。かやぶき屋根も瓦と交代し、かしきにかわって過燐酸石炭などの金肥が入り、回転除草機や、足踏脱穀機も普及していった。それに伴って支出も多くなり、自給自足態勢はくずれ、貨幣経済へと急激に変化していった。貨幣経済に対応するため相互扶助の精神を発揮したが、根本的には金を得なくては解決出来ず、米や麦以外の換金作物が考えられなくてはならなかった（宿毛市史編纂委員会，1997年，pp. 1048）。

戦後は工業化の進展とともに、農村の過疎化が進行した。「朝鮮動乱以後我が国の工業は着々と進展し、35年池田内閣が誕生すると、所得倍增計画をうち出して日本は高度経済成長期に入り、工業や他産業従事者と、農業従事者との間に大きな開きができた。又工業の発達に伴う貿易面から工業製品の見返りとして農産物を中心とする貿易の自由化が、わが国経済界や先進諸国からも要請があり、政府は35年貿易の自由化にふみきり、自由化率を高めて、39年10月には93%の自由化を実現した。これにより農産物価格は暴落し、甘藷作りなどもだんだん行われなくなった。このことから麦甘藷などが主作物である開拓農家や小規模経営の農家では経済が成りたたなくなってきた。工業への雇用の増大と、農村の機械化や経営改善による労働時間の短縮などが相まって、農村人口の流出が目立ち始め、三ちゃん農業という言葉も生れたように、農業を老人や嫁などにまかせ出稼ぎに出る人が多くなると同時に、兼業農家も増大していった。特に青少年の離農が目立つようになり、農村に残っているのは、大きな経営規模の農家の跡とりだけというような状態で、農家の嫁ききんが世間の注目を集めるようになった。又一家離村という形も多く、小筑紫町葛箆つづら部落は1軒もなくなり橋上町出井、下藤、奥藤部落などのように離村者が多くて部落の形をなさなくなっている所もある（宿毛市史編纂委員会，1997年，pp. 1074）。

〈漁師のくらし〉

宿毛湾では、古くから漁がおこなわれてきた。鯉つりは藩政時代より宿毛湾一帯で行われていたらしく、紀州の漁民が内外ノ浦を基地として鯉つりをしていた記録もある。明治の初め頃は、栄喜、大海の人達も漁のない時は手押しのもろ船で遠く足摺沖まで、鯉の群れを追って出漁したそうである（宿毛市史編纂委員会，1997年，pp. 1044-1045）。明治から大正にかけては、大島から宇須々木沿岸、外ノ浦、大海沿岸まで、いわしやさば、きびなごが回遊してきた。

大正元年頃になると水産行政もだんだん確立され、「専用漁業権が与えられ鯉いわし豊漁（鯉瓢曳網での漁獲が主であったと思われる）毎年数万円の漁獲があった」と大島漁業組合沿革史には記されている。この頃になると片島においては氷も販売されるようになり、貯蔵面で一大進歩を遂げており、『大内町史』によれば、大正6年には鯉いわし、鯖、ヨコ豊漁、大正7年には魚価暴騰と記録されているが、当時は欧州大戦による好景気の影響をうけたもので、漁村成金といわれる人もできた程である。しかし、運送の技術や冷蔵などの機能がないこの時代に、魚の価格を調整することは難しく、価格の変動に苦しめられている。昭和に入ると、漁獲が少ない上に魚価がさがった。当時は欧州大戦の不況の時期にあたり、金融恐慌、世界大恐慌と続き、農村および都市を不況におとし入れた。そのため都市や農村を消費対象とする魚業は消費がのびず、価格が暴落した。漁村においてはこの不況を乗り切る対策として、多量に魚をとって少しでも収入をあげようとした。これがますます値段をひきさげる結果となり、他の商品よりも一そうひどい値下りをした。恐慌時の全国的な魚価指数は、昭和4年を100としたとき、6年59、8年44、9年56で、8年頃は4年の半分にさがっている。このような状況にあったので宿毛付近でも、この不況対策としていろいろのことが行なわれている。（宿毛市史編纂委員会，1997年，pp. 1132-1134）。

魚の消費や流通の様子からも、宿毛のくらしを感じ取ることができる。宿毛湾沿岸の漁村には大抵後背地に段々畑が山上まで切り開かれているのが見受けられるが、これは藩政時代から開かれていたもので、漁民が麦や甘藷を作り食糧の自給自足をしていた生活の名残でもある。明治の始め頃は漁村に限らず、農村においても自給自足の生活がなされており、宿毛湾沿岸は中央より遠く離れ、販路にも恵まれなかったため、魚の貨幣価値は少なかったと思われ、魚獲がたくさんあれば処置に困る状態であり、家庭の脂肪分及び蛋白質の補給の役割と、近隣の農家との薪や穀物との物々交換品としての役目が大きかったものと考えられる。したがって農耕と漁業との比率は大して変らないもので半農半漁の生活であった。所が明治も後半になって来ると日本もだんだん工業が発達し、資本主義的貨幣経済が漁村にも浸透し、自給自足経済であった漁村に貨幣の必要性をもたらすと同時に、魚の貨幣価値を高めていった。そこで宿毛に近い大島では、林新田に堤ができて交通が便利になると主婦による魚の行商が行なわれるようになった。氷も無く運搬する車もない当時は、荷かごを天びん棒でになって魚の鮮度を落さないために宿毛まで走るようにし

て運び売り歩いた。又与市明、萩原、仲須賀、沖須賀や和田、二宮、中角、橋上、平田、山田、芳奈付近や近くの農村へも行商に行ったが、当時の農村はまだ自給性が強く、田植え、祭り、盆と言った時期や正月等に大量に魚類を買う以外、平常の農家の食生活では余り魚類を買うことは無かった。そこで得意先の村々を売り歩く場合鮮魚の外に塩干にしたいわしやあじ等の干物や、煮干にしたいりこや生節、生節を焼いた焼節等保存のきくもの等も多く売られた。農家は金銭での取引を喜ばなかったのも米や豆、麦等との物々交換が多かった。又出来秋までの付け貸しをするような事も行なわれた。交換した品物は自家の食糧にし余分の物は売って金に替えた。宿毛中村間に道路が開通し交通が便利になると、夕方魚が荷上げされた時は荷車をひいて中村までも売りに行く人があったが、この人達は道のりが遠く道が悪い上に途中で市山峠があったので、大変苦勞して夜通し歩き中村の朝の市にかけたと云う（宿毛市史編纂委員会，1997年，pp. 1146-1148）。

太平洋戦争中は魚も統制となり、魚の仲買人等もいろいろと制約を受けたが、終戦を迎えると再び活況を取りもどし昭和30年代後半になると冷凍車も登場するようになったのでますます販路が拡大され、現在では宿毛湾の魚が京浜に出荷されるかと思うと、北海道のさば等がはまちのえさとしてやって来ると言う状態で、魚の流通も全国的となってきた。（宿毛市史編纂委員会，1997年，pp.1150）。こうした変遷を経て、現在水産業は宿毛の主要な産業の一つになっている。

3-4 現在の宿毛の暮らし

ここまでに整理してきた歴史的・地理的背景は、現在の宿毛の生活の中にも大きく影響を与えている。朝7時頃に宿毛の漁協に伺うと、漁を終えた漁師が談笑している光景を目にする。夜中にキビナゴの漁へと出かけ、明け方帰ってくるのである。また、海沿いの地域では、豊漁に感謝して秋祭りが行われる。片島の秋祭りでは獅子舞、母島の秋祭りでは牛鬼と神輿と特徴があり、それぞれ江戸時代からの歴史的なルーツを持っている。沖の島町弘瀬では、鎌倉時代の三浦氏一族が追われてたどり着いた苦難を表現し、供養のためのお祭りとして傘鉾が行われている。他にも平田のヤーサイ祭りや、小筑紫の鎮念祭りなど、多くの祭りがある。年末年始にも縁起を重んじ、いろいろな風習がある。漁場を抱える栄喜では、年末、網上げと上がり祝いがあり、さらに春・夏・秋、お日待祭りなどを伝承している（矢木，2012，pp.35-49）。このように、地理的な条件や産業に紐づく文化やライフスタイルが根付いている。こうした暮らしの在り方が地域の中に垣間見える。

その一方で、そうした豊かさが見えにくくなっているという現実もある。第一次世界大戦以降、高度経済成長期を経て、宿毛の生活にも変化した。工業の発展に伴い、1960年代頃か若者をはじめとして大都市圏への流出が顕著となり、出生数の減少と相まって人口が著しく減少した。戦後から高度経済成長期には、新興住宅や工業団地の開発なども進められ、商店街もにぎわいをみせたが、次第に客が減り、シャッター商店街化していった。1980年以降、人口の減少傾向が続き、2015年10月31日の時点での人口は21,632人である。

農家の数で見ても、昭和 60 年に 1661 あったのに対して、平成 22 年には 552 と 3 分の 1 程度に減少しており、担い手の高齢化などの問題も叫ばれている。第 1 次産業に従事する人の数は年々減少傾向にあり、担い手の高齢化も進行するなど課題を抱えている。

今後さらに少子高齢化が進行することが予測されている。少子高齢化にともない、小中学校の統廃合が相次ぎ、母校がなくなったと悲しむ声を聞く。それによって、小学校単位で行われていたお祭りや文化の継承の機会も失われつつある。様々な課題を抱えている宿毛において、どのような意識が渦巻いているのかをアンケートとヒアリングを通してみていく。

3-5 アンケート調査から見る宿毛への期待

今回のアンケートは、宿毛在住の 20 代～50 代、15 人を対象に行った。回答者の職種としては、市役所職員、漁業関係者、サービス業（ホテル）、地元の写真屋さん、など地域に根付いた仕事を持っていらっしゃる方が多く、市役所の方以外はほとんどが経営者である。すくすく宿毛プロジェクトの活動報告会終了後にその場で回答をお願いしたため、地域の活動に興味を持っている方が多い。質問項目としては、Ⅰ.宿毛が好きかどうか、Ⅱ.宿毛の未来はどのようなものであるか、Ⅲ.宿毛の未来について話す機会はあるかという 3 つの大きな問いと、それぞれに付随する問いを 3～5 つ用意した。（参考資料 1）答え方としては、自由記述欄を多く設け、考えを書いてもらう形式をとった。そのため、回答に挙げたキーワードを挙げながら、分析していく手法をとる。

〈アンケートの質問項目〉

I. 宿毛について

1-1 宿毛は好きですか？ 好き←（1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5）→きらい

1-2 どんどころが好き（／きらい）ですか？

1-3 子どもや孫の世代に残したいことはありますか？

例：自然、文化、歴史、祭り、偉人、くらし

II. 宿毛の理想像

2-1 宿毛の未来は…？ 明るい（1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5）暗い

2-2 宿毛はこれからどうなると思いますか？

2-3 宿毛がこうあってほしい、という理想像はありますか？

どうなることを期待されますか？

2-4 それに対してご自身が取り組みたいこと、すべきだと思うことはありますか？

2-5 子どもたちの世代になにを期待しますか？

III. 地域のことを考える環境について

3-1 今日伺ったようなお話をすることはありますか？

どのようなご関係の方とされますか？

3-2 そこではどのようなお話になりますか？

3-3 年代の異なる人や宿毛外部の方と、宿毛のことを話す機会はありますか？

はじめに、3つの問いについてそれぞれ結果を整理する。1つ目の「宿毛が好きかどうか」という問いに対しては、宿毛に対して好意的な回答が多く寄せられた。好きからきらいまでを1から5までの5段階で答えてもらったところ、1（すき）が6票、2（やや好き）8票、3（どちらともいえない）1票、4（ややきらい）が1票、5（きらい）という結果になり、宿毛は好きであると回答している人が多い。この問いに関連して、宿毛の好きなどころを記述してもらう項目には、「自然」が最も多く、「歴史」「文化」が続く。「生まれ育った場所への愛着」や、人のゆたかさや人間関係なども挙げた。次の世代に残したいことを訪ねた欄には、「自然」「文化」「歴史」に加えて、「郷土愛」や「宿毛を好きでいられる気持ち」、「暮らせる環境」なども挙げた。これらの回答からは、地域に残っている20代～40代は宿毛に対して良いイメージを持っており、自分たちの好きな宿毛を次の世代に残したいという意思があることが分かる。残したい中身に少しずつ差はあるものの、基本的な捉え方としては変わらず、今の宿毛が好きで残したいという思いが読み取れる。

2つ目は、宿毛の理想像について伺った。「宿毛の未来は明るいかな？」という質問に対して、同じように5段階で答えてもらったところ、1（明るい）が2、2（やや明るい）が1、3（どちらともいえない）が8であり、4（やや暗い）、5（暗い）がともに2、無回答もあった。自由記述欄には、「このまま人口減が続けば難しい」「理想は明るくなければなりません。しかし、自分たちの努力ではどうにもならない現実も確かに存在する。」「明るいと思いたいが、このままだと厳しい、市が成り立たなくなる」「宿毛を好きと思える人がいなくなる」など「（現状は明るくないが、）明るくあってほしい」という回答が多く見られた。それに対して、「なんとかなる。」「人口を増やせばなんとかなる」というような漠然とした答えもあった。未来に対して期待したいという思いがある一方で、自分だけではどうにもならない、変えることが難しいという意識があることが読み取れる。

「宿毛が今後どうなると思うか？」という問いに対しては、「人口減少」に関する答えが最も多く、「少子高齢化」「学校の統廃合」「地区の衰退」などが進むことが挙げられた。また、理想や期待することの欄には、「人口増」によるにぎわいの創出が多く、産業や雇用面の期待が表れている。また、「帰ってきたいと思った時にはいつでも帰ってこれる場所になりたい」「地元を好きでいられること、観光や移住にこだわるのではなく、住みやすく愛することができるまち」など、住民の思いを大切にす声も挙がる。ここからは、宿毛をより住みやすい町にして人口を増やしたい、子どもたちにとどまってほしいという思いが読み取れる。一方で、子どもたちの世代に何を期待するかという問いに対しては、回答にばらつきがあった。「郷土愛」「地元への就職」「Uターン」など、地域に残ることを期待する意

見と「好きなことをしてくれればいい」など、地域にこだわらずに活躍してほしいという意見で、回答にばらつきが見られた。「一度外にでて学んで、宿毛に還元してほしい」という意見も見られたが、これは地元に残って地域を盛り上げてほしいという思いと、自分にあった場所で活躍してほしいという、2つの気持ちの間で揺れ、なんとか宿毛に還元してほしいという気持ちの現れだろう。

3つ目は、地域のことを考える機会の有無についてであり、地域のことを話す機会があまりないと答えた人が多かった。話すと答えた人も、話す相手は同級生や同業者が多く、地域を離れた人や外部の人と話す機会は少ないという結果になった。また、内容に関しては、「ムリだろう」「とりとめのない話で結論は出ない」「突っ込んだ話にならない」などという回答が多く、宿毛では地域のことを話す機会が少なく、なかなか質のある話ができないことが分かった。なんとかしたいけど、自分ではどうにもならない感じる背景には、地域のことを一緒に考えていく仲間や話し合える場がない点があるのではないか。

ここまで、3つの問いに関して得られた結果を整理する。1点目に、アンケートに答えてくれた人が宿毛は好きだと答えていることであり、その内容は、生まれ育った場所であること、自然、文化などである。2つ目は、地域には明るい未来を描きにくい状況あることであり、「明るくあってほしい」という回答結果に表れている。3点目は、宿毛の理想像としては、住みやすいまちであり続け、人口を増やし、にぎやかであってほしいというイメージがあることである。4点目は、子どもたちへの期待には、2つの方向性がある点である。1つ目は、地元に残ってほしいというもので、2つ目は外に出て活躍してほしいというものである。5点目に、地域のことを考える機会は少ないということである。

3-6 ヒアリング調査から見える諦め感

アンケートに加えて、4人の方にヒアリングを行った。私塾を営む40代の女性、養殖の会社を経営する30代の男性、柑橘農家の30代男性、宿毛を離れて名古屋の大学に通う20代男性である。性別、職業、家族構成、などが異なる人において、それぞれ1時間ほどお話を伺った。内容としては、地域に諦め感を感じるかと質問してそこからそれぞれの生き立ちや経歴を合わせて、宿毛に対して考えていることを話してもらった。

5人に伺った話をまとめるとそれぞれ以下ようになる。

Aさん

1人目は、40代の女性である。お子様もいらっしゃる、子どものクラブや習い事などでもネットワークがある。地域の活動にも積極的に参加されているため、そうした団体や市などとの交流も深い。そうした視点から地域の諦め感について思うことを話していただいた。

Aさんの話の内容を大きく3つに分類してまとめる。1つ目は、上の世代からの圧力の話である。若い人が地域でなにかやろうとしても、地域を引っ張ってきた上の世代が「若い

やつらがバカなことを言ってる、ああしてこうしないとだめなんだ」という話をして、若い子つぶしをしている、と話す。自分たちの経験をもとに、「そんなんじゃ絶対にできない」と言ったり、お金や知恵は出さずにまあやってみたら？という投げやりな態度であったりする。

2つ目に農業の現状である。「諦め感と言えば農業、漁業」と第一次産業の現状を客観的に語る。近年、かつての大地主というようなモデルはなく、どこも固定資産税を払うことに精一杯だという。農業は次の代が確保できないと、農地を広げたり農具をかったりするような投資をすることが難しい。人手を確保しようと思っても、もともと家族単位で行われてきたおり、雇用と言う考え方が農業のシステムに合致しない。忙しい時期に限られていたり、急な天候の変化で、仕事が期間限定になってしまったり、当日作業が中止になったりするような可能性があるからだ。そのため、人を雇ったり、それに対して一定のお給料を支払ったりすることがなかなかできない。収穫してみないと、その年の収入がわからないため、月々のお給料を従業員に渡すとなると、かなりハードルが高く、その門戸は閉ざされてしまいがちである。

3つ目に、地域の負け組、勝ち組の話である。地元の（中上流）家庭には、地元の稼業をついでもらうより、そとで成功してくれた方が良いという意識がある。地元の稼業を継いでも看板もなく、親の荷物という感覚がある。Aさんは、負け組観という言葉を使って、そうした感覚を説明した。最高の勝ち組は医者、次は都市で企業に勤めて働くことである。また、宿毛に残る選択肢としての勝ち組は、市役所や公務員になることであるという。市役所であれば転勤もなく、親の近くにいることができる。地元にいれば親の顔がきき、子どものサポートをすることもできる。こうした親世代の考え方の背景には、地域に対して自信を持ってないことが挙げられる。アンケート、およびヒアリングにおいて、「子どもたちには幸せになってほしい」という思いが語られた。宿毛に残っている人の多くは稼業がある人であるが、そうした人も、稼業で親子2代食べていく自信がない、稼業がいつまで続くかわからないという思いを抱え、子どもたちには好きなことをやってもらいたいという思いを持っている。こうした宿毛の親世代は、宿毛で暮らす道を模索する人生を用意していない。市内に進学校がないため、「意識の高い親」は、高校、もしくは中学校から地域を離れる選択肢を用意する。まずは高知に向けて、最低でも中村高校（隣の市の高校）に入れて、大学は必須というようなルールを小学生の頃から敷いている。東京に住んでいれば、なんとなく進学し、気が付いたら大学生になっているというパターンも多い。将来のことを深く考えていなくても、その後の選択の幅は広く残されており、修正がしやすい。それに対して、宿毛のような地理的に不利な条件を抱える地域では、塾や予備校がなく、情報も集まりにくい。なにかやりたいと思ったときにはもう手遅れになる可能性が高い。途中で進路を変更することも難しく、進路選択の幅が狭まってしまうタイミングが早いのである。そうした状況であるからこそ、早めに考えておかないと流されてしまうという危機感があり、親は外に出て幸せになるというルールを用意する。

Aさんは、地域の活動にも関わっている。そのうちの 하나가、卒会の活動である。卒会とは、早稲田大学と宿毛をつなぐジョイントのような組織であり、学生が宿毛で活動する際には大変お世話になっている。卒会は、毎年3月に卒立祭を開催して、小中学生の作文のコンクールや発表をしたり、地元の宿毛高校が早稲田の指定校推薦の卒をもらえるように働きかけたりしている。

彼女自身は東京で生活していたこともあり、田舎で流れに身を任せることへの危機感を抱いている。また、それまでの経験から、様々な選択の可能性を知っている。二つの経験から、手をかけないとそれなりの人生になるという考えにたどり着いたのだろう。Aさんのお話からは、情報や機会が限られている地域であることを改めて思い知らされる。早い段階で進路を選択し、準備を進めなければならないという状況の中で、どのような道を選びとっていくのか、そもそも選ぶことができるのか、限られた選択肢の中で、親も子も揺れていることが伺える。

Bさん

2人目は、水産業を営む30代の男性である。高校卒業後、宿毛を離れて専門学校に行ったのち、土木系の会社に勤めた。その後、水産業の会社に移って仕事を経て、新しい事業に取り組む。現在はお子様が3人いらっしゃる、地域の活動にも関わっている。

諦め感について伺うと、「宿毛でなにやってもね一宿毛で商売してもね一っていうそういうのはなにかしらやっぱ感じますね。で解決策をたぶんしないので、自分の力だけじゃどうにもないっていうのとね、そういう空気感っていうのが重たいですよ。」という。そうした空気が広がるようになったのは、30~40年前のことではないかと振り返る。地域の高齢者からは「昔は良かった」という話を聞くという。「昔はよかった」と語る世代が活躍していたころは、戦後から高度経済成長期にあたる。景気がよく、何をやっても成功するという状態の中で、希望に満ちた生活、未来予測をしていた。それが一転して、この30年ほどで地域の経済がうまくまわらなくなり、何をやっても失敗する、という経験が地域に刷り込まれてしまった。

当時の状況を表す2つのエピソードを紹介する。1つ目のエピソードは、公務員の評価が今とは逆で低かったという話である。その頃は商売に勢いがあり、公務員と比べてのたくさんのお金を稼ぐことができた。そのため、公務員になろうとすると、なんで公務員なんかになるの？と聞かれたという。2つ目は、身近にいた事業者のことである。不動産、喫茶店、パチンコ、新しく始めることがすべてうまくいったという。真似して始めた人でさえ、うまくいったそうだ。

その後の変化について、Bさんの言葉をそのまま借りる。「この30年くらいずっと、貧乏になり続けてきた結果、何やってももう無駄だと、なにやっても失敗する、なにやってもいかん、どうせ、なにやってもいかんっていうような考えになってしまって、そまって、そういう絶望感みたいなのをもちながら子育てしていた人たちが、僕らみたいな世代を育

ててしまって、その結果、俺ら30代前半とかいまの40くらいの方はそうかもしれないですけど、どうせ宿毛でなにやってもいかんよ、っていう考え方が伝播しよう、ですよ。僕なんか生まれた頃からずっとそんな感じ。小学校から中高生、90年代、日本の経済が混乱したときやから、それを見て、一番感性豊かな、感受性豊かなこども時代を過ごしてるから、そういう意識があるんですよ。っていうのがたぶん正体なんですよ。貧乏性？なんですよ。しみついちゃってる。」

この発言からは、3つのことが分かる。1つ目は社会の景気と住民の意識は相関関係があるという点である。景気がよく、何をやっても成功するという状態の中で、多くの人が希望に満ちた生活、未来予測をしていた。それが一転して、1990年以降、バブルが崩壊すると、次はなにをやってもうまくいかない状況になった。そうした中では、住民の間に絶望感が生み出されて、広がっていった。

2つ目はその頃に失敗の経験が積み重ねられてしまった点である。景気が悪い中で企業・個人ともに様々なことへ挑戦するが、うまくいかない。多くの失敗と挫折から、なにをやってもうまくいかない、どうせなにをしても失敗するという考えが、経験として刷り込まれてしまった。

3つ目に、そうした感覚が世代を超えて伝播するという点である。Bさんは地域全体に「どうせ宿毛でなにをやってもいかん」という考え方がしみついていて、と振り返る。親の世代から、子ども、孫へと、失敗の記憶が受け継がれていく。

Bさんはそうした感覚についてお話された後、ご自身のこれまでに教えてくださった。特に、宿毛に戻ってきてからは、様々な苦労をされている。会社を立ち上げて経営する中で、宿毛の雇用を一人でも増やせるようにする、というようなお話も聞く。その強さは宿毛で生まれ、育ってきたということから来ているという。

Cさん

3人目は、宿毛を離れて名古屋の大学に通う大学生である。小中と宿毛の学校に通い、高校は宿毛を離れて、高知市内の進学校に進学した。小さいころから英語を勉強しており、それがモチベーションになって、勉学に励んだという。現在は名古屋の大学に進学し、夏と春の長期休業中に帰ってきて、家の仕事を手伝っている。

Cくんには同級生の進路と宿毛について思うことを伺った。同級生の進路に関して、宿毛に残る人は少ないと述べる。その理由として宿毛には職がないことを挙げる。宿毛に残らなくても、近辺で働く人は一定数いる。そうした人の中には、宿毛高校、もしくは中村高校を出て専門学校に通い、美容・理容・介護などの専門的な仕事をしている人が多い。漁師になる人や、自衛隊に入った友だちもいるという。もしくは、市役所や先生など公務員として宿毛に残って働くことを期待され、志望する人もいる。高校から宿毛を離れた人はほとんどが宿毛には戻ってこないという。

次に宿毛がこれからどうなると思うかを尋ねると、未来は暗いという返答だった。少子

高齢化がもっと進んで人がいなくなると述べ、その理由に遊ぶ場所、みんなで集まれる場所、働く場所、なにもないからだした。

Cくん自身は、温泉が好きで将来は旅館を経営したいと話していた。実家の仕事は継がずに自分の気に入ったところで商売をしたい、そのためにまずは社会に出て働きたいと、将来の展望を語った。Cくんの話からは、中高生にとっての進路選択に関して、宿毛での就職に対してあまり前向きとは言えない様子うかがえる。宿毛で就職するのであれば、公務員という意識強そうだ。また、大学生の視点からみて、宿毛はなにもないところであると認識されていることも分かる。

今回のヒアリングでは、それぞれの視点から宿毛の諦め感について語っていただいた。その中で、進路選択の幅のお話、宿毛の未来、自身（もしくは子どもの）の将来像などについて話を聞くことができた。ここであがったキーワードとして、ルール、選択肢、経験、伝播などを次の分析に活かしていきたい。

4章 宿毛における諦め感

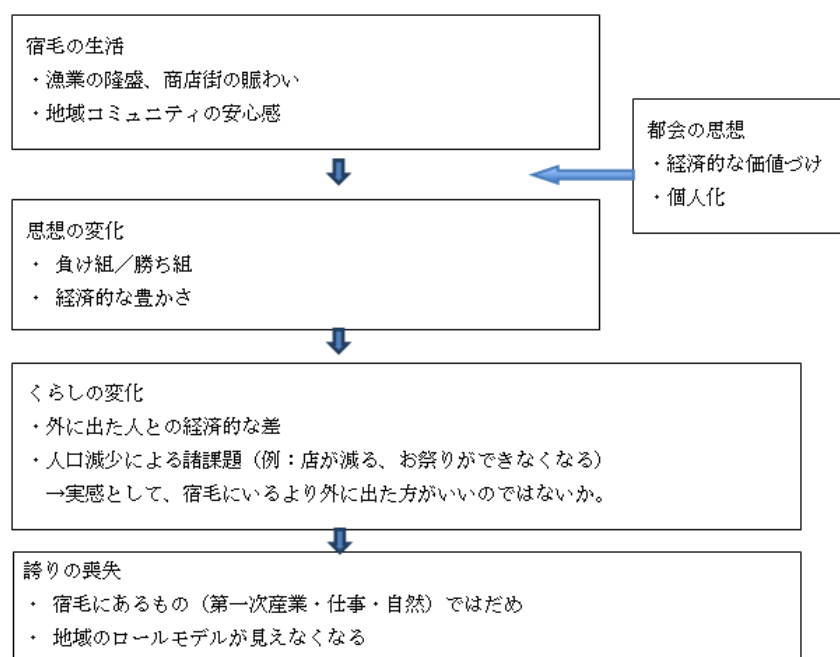
4-1 地域の資源に対する諦め感

第4章では、宿毛で行ったヒアリングとアンケートの結果から諦め感の類型化を試みる。第1の諦め感として、地域の資源に対する諦め感を挙げる。

宿毛を訪れると、「この地域にはなにもない」という話をよく聞く。地元の方に、オススメのスポットや訪れるべき場所を訪ねても、同様に「なにもない」と言われる。地元のおじいちゃんおばあちゃん、漁師さんにお話を伺うと、地域の産業の話や昔のまちの様子、自然の中での遊び方など、宿毛の豊かな生活像が見えてくるが、そうした部分にはなかなか目が行かず、都会への距離が遠いこと、これといえる観光資源が乏しいこと、やりたい仕事がないこと、などが話題になる。

もともと、漁業が盛んで、歴史的な偉人を輩出してきた宿毛は、地域のくらしの豊かさを感じながら生活していた。そこには、コミュニティの安心感もあった。しかし戦後、工業の発展、高度経済成長の波、個人化など、都会の思想が入ってくることによって、地域の中にも思想の変化が起こる。地域の中に、負け組・勝ち組の意識が作られ、経済的な豊かさをはかる尺度が生まれる。高度経済成長期の農工の格差や、人口減少による諸課題などを経験し、実感として宿毛にいるよりもそとに出る方が豊かではないか、というような感覚に陥る。こうして、宿毛にある資源（産業、仕事、自然）に対する諦め感が生じ、広がっていく。

中高生に話を聞いても、遊ぶところがない、という意見があがる。たしかに、東京にあるような映画館や遊園地、オシャレな喫茶店は宿毛にはない。経済的な尺度で図れないものに対する評価をするのは難しくこの地域にはなにもないという結論に至ってしまう。



〈図1 地域資源への諦め感〉

4-2 選択肢に対する諦め感

第2の諦め感として、選択肢に対する諦め感をあげる。ヒアリングの中で、3人が「選択肢がない」という話を挙げたが、選択肢に対する諦め感とは、進路や生き方に対するものであり、宿毛に生まれた人がその後の生き方を選び取っていく際に地域に感じる諦め感である。ここでは2つの方向から、選択肢に対する諦め感を考える。

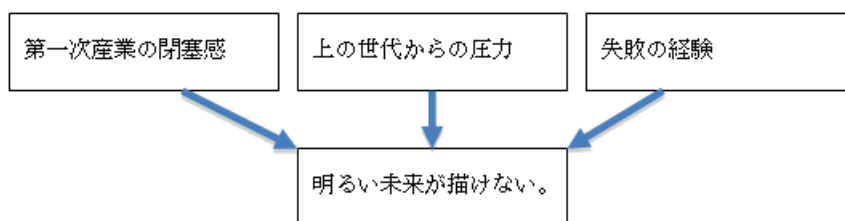
1つ目に、宿毛で描ける選択肢の幅を小さいことに対する諦め感がある。最初に述べたように宿毛は、高知県の西南に位置し、高知市内までも2時間半くらいかかる条件不利地域である。高知、大阪に出るまでに時間がかかることは、物理的な距離の他に心理的に不利な感覚を生み出す。情報や経験、機会が少なく、いろいろな生き方をしている人に出会ったり、話を聞いたりすることが少なく、幅広い選択肢を描けない。宿毛の中でも分かりやすい2つの選択肢として、まずは地域に残る、地域から離れるという大きく2つの選択肢がある。残る場合は、宿毛の主要産業である、第1次産業や観光業で働くことがイメージできるだろう。少ない選択肢の中の1つである、宿毛の第一次産業は厳しい状況に置かれている。

宿毛を離れる選択肢としては、大学に進学してそのまま都心で働くイメージがある。しかし、宿毛の実家から通える範囲に大学はなく、進学塾や予備校などもない。そのため、大学進学を考えるのであれば、早い段階から準備を始めなければならない。これは、大学に行きたいと思っても、準備が間に合わないという事態になることにもなる。何をやるにしても、選択肢の幅が狭まるタイミングが早いことがわかる。これをやりたいと思えることに出会える機会が少なく、かつ出会えた場合にそれに挑戦できる可能性が低いことが言える。このように、宿毛の地理的背景、歴史的背景、産業構造などの影響から、地域に描ける選択肢が少ないことが人々の諦め感になる。

2つ目に、限られた選択肢の中からも、実は自分の進むべき道を選ぶことができないという諦め感がある。宿毛には大きく地域に残る、地域から離れるという2つの選択肢がある。前に述べたように、かなり早い段階でその選択に迫られる。実際には、家庭の環境や兄弟構成、学力などの要素を考慮して、周囲からある程度のルールを敷かれる状況がある。例えば、宿毛に残りたくても、家業がない家庭では仕事を見つけるのが難しい。そうすると、宿毛を離れるか、公務員になるか、看護や福祉など宿毛で必要とされる仕事に就くというルールがおのずと見えてくる。公務員を目指すのであれば、早い段階で大学進学を視野に入れた勉強を始めることが求められ、福祉の道を選ぶのであれば高校卒業後に専門学校に進むなどの選択肢が現れる。

宿毛高校の卒業生の進路をみると、3分の1が就職し、3分の1が専門学校に進学しているが、中高生に話を聞くとこの進路を自分で選び取ったという意識は薄く、なんとなくこうなった、という反応が返ってくる。宿毛を離れる選択肢をとった人も、なにかやりたいことがあるというパターンもあるものの、宿毛を離れたかったという漠然な意見も多いように思われる。早い段階からルールを敷かれてしまい、地域を離れてしまうと、宿毛内に

に、知恵や資金、ノウハウを提供しない。例えば、まちづくりや地域活動の局面において、ロータリークラブやライオンズクラブ、青年会議所などが中心となることが多い。そうした団体内には、上の世代が強い傾向がある。20代～30代が新しいことをやろうとしたときに、上の世代が反対したり、投げやりな態度をとったりすることもあるという。これに加えて、30代～40代で地域活動に関わっている人の中には、もともと宿毛に家業があって、勉強のために一度地域を離れて就職してから宿毛に戻ってきた人も多い。その中には中学や高校から外に出ている人もいる。外に出るタイミングが早いほど、地元でのネットワークが弱くなる。上の世代に比べると全体的にネットワークが弱く、親の世代に頼らざるを得なくなる構図が残る。まちづくりの決断の場面で若い人の意見が通らなかつたり、若い人の中で新しい動きがうまれても、上の世代が反対したり、知恵や資金面での援助をしなかつたりすることもある。このように、失敗の経験が地域の中で蓄積され、世代を超えて伝播し、自分が頑張っても未来は変えられないという感覚になる。その結果、宿毛の明るい未来を描くことができず、未来への諦め感につながっていく。



〈図3 未来への諦め感〉

4-4 諦め感醸成のプロセス

宿毛での調査をもとに個々が地域に対して抱く諦め感を類型化してまとめた。ここでは、こうした諦め感が生み出され、地域の中で醸成されていくプロセスについて考察する。諦め感が生じる要素のひとつとして、第1章で取り上げたような地域を取り巻く社会情勢が挙げられる。ヒアリングを受けて、諦め感が地域に生じるようになったのは、高度経済成長期以降であると仮定する。長引く不景気の中で、なにをやってもうまくいかないという空気の中で、地域の諦め感は醸成されていく。

その時期の地域政策について触れたい。吉野は、1930年代から現在までの約70年間を対象に4つの画期に分けて考察している。第1期は1931年から1945年までの戦時地域開発体制期、第2期は1946年から1969年までの拠点開発期、第3期は1970年から1996年までの分散開発期、第4期が1997年から現在までの都市再生期である。諦め感の醸成の期間と重なる第3期には、均衡発展による地域再編が目指された1969年には、新全国総合開発計画（新全総）が発表され、過密過疎、地域格差を解消するための構想が練られた。その後も、企業誘致やリゾート施設の建設促進などが行われたが、開発費用が回収されな

いなどの傷を残した。この時期の画一的な地域開発政策は、地方の自立をはばみ、地方の歴史や文化を活かした個性ある産業振興を抑制し、産業の誘致や移転のみに目が向けられ、限界に突き当たった（吉野，2006年，pp.7-18）。

この時期の農村社会の変化について、大久保は、農民層の「生活様式の都市化」が生じ、農民の生活環境も大きく変容を強いられたと述べる。それまで自給部分を残していた農家経済が解体し、農民層の労働力商品化や低賃金労働者化が起こり、農業収入よりも農外収入、農外所得に依存することになったとする。そうして農工間の不均等発展と所得格差が拡大し、農民の生産と生活が資本の支配する商品経済に包摂され、農民生活がより一層都市的なものに構造化される（大久保，2006年，pp.35）。

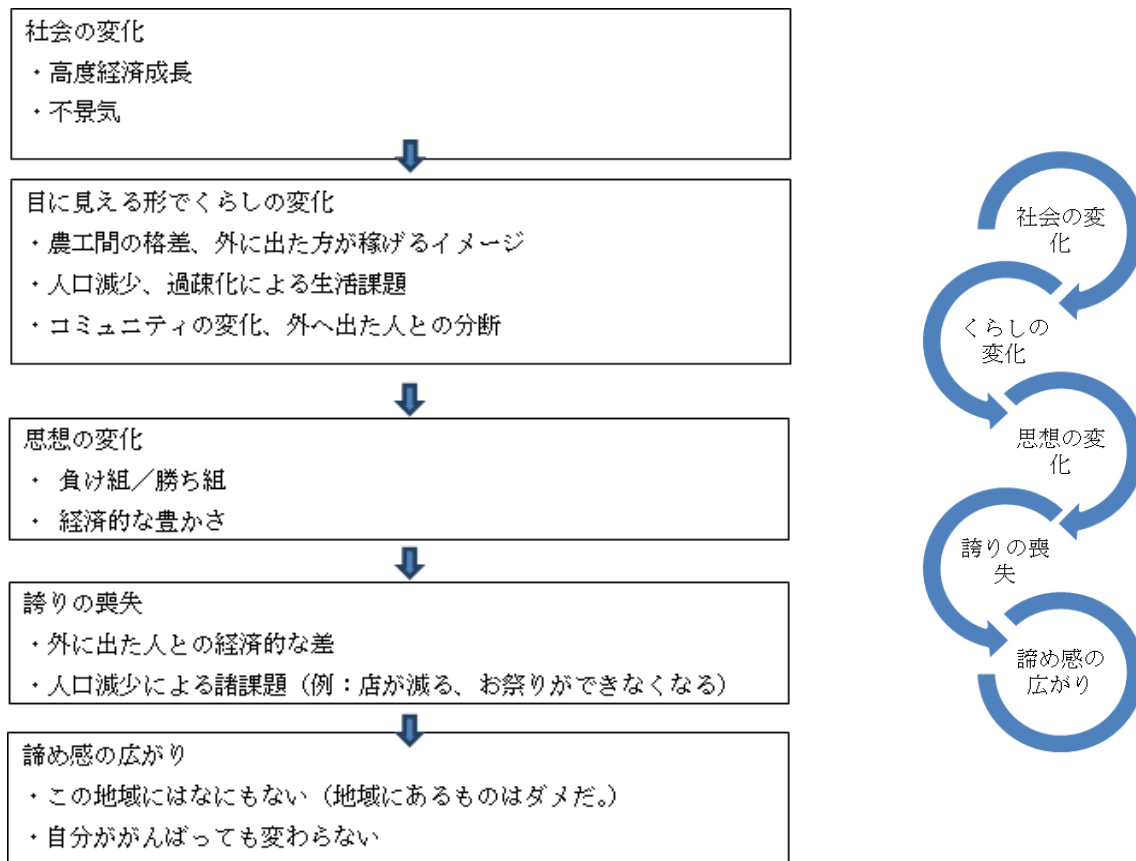
このように、高度経済成長後の地域社会は画一的な政策に翻弄され、生活の構造やコミュニティの在り方を変容せざるを得なかった。それに加えて、Bさんのヒアリングからは、学歴社会化への影響も読み取れる。30年前は現在に比べて大学進学率も低く、学歴がモノをいう社会ではなく、労働力が評価された。経済的な状況とも関連するが、その頃はそれぞれに活躍の道があり、中学、高校を卒業してから、地元の企業や第一次産業に就職するという地域で生きるモデルが存在した。そこには、今後会社や産業はもっと成長する、働けば働くほどお給料がもらえる、というような未来への明るいイメージがあった。その後、バブルの崩壊や長引く不景気を経験する中で、社会の評価軸は次第に変化し、学歴が重視される傾向が強くなった。それを受けて、「若いものを外に送り出さないかん」という意見に拍車がかかるようになった。宿毛には大学がなく、大学進学を目指すのであれば高校から外に出て勉強をする必要があるとされる。その結果、早い段階から宿毛を離れる人が増えて、今日の人口減少にも拍車がかかってしまった。外に流出していく人が増え、家族のつながり方も以前と比べると希薄になっていった。地元の自然の中で思い切り遊んだり、地域の産業に触れたりする機会も減った。こうして、地域に存在する生き方のモデルがますます見えにくくなっている。

こうしたプロセスを通して、地域の思想の変化が起こったことが考えられる。漁業や農業は生活の基盤であり、そのうえに文化や思想が根付いていた。経済的な尺度で地域を見ると、工業や都市の生活と比べて、良くないように見える。地域に根付いていた生活の豊かさや文化が見えにくくなる。その結果、地域に対して誇りを持たない状況が徐々に広がっていったのではないか。

過疎化の進行は、地域にさらに追い打ちをかけ、それでもなんとかやってきた漁業や農業の存続がむずかしくなっている。人口の減少や担い手の不在から、そこに根付いていた文化や慣習の継承ができなくなる。宿毛には集落ごとにお祭りがあったが、小学校の統廃合や担い手の高齢化などを受けて、失われつつある。

ここまで、諦め感を生み出す要因になった社会の変化として、画一的な地域政策、不景気、第一次産業の苦しい現状、学歴社会へのシフトをあげ、その結果農村の生活構造が大きく変容を強いられたことを挙げた。そうした変容を経験して、地域には、経済的な、都

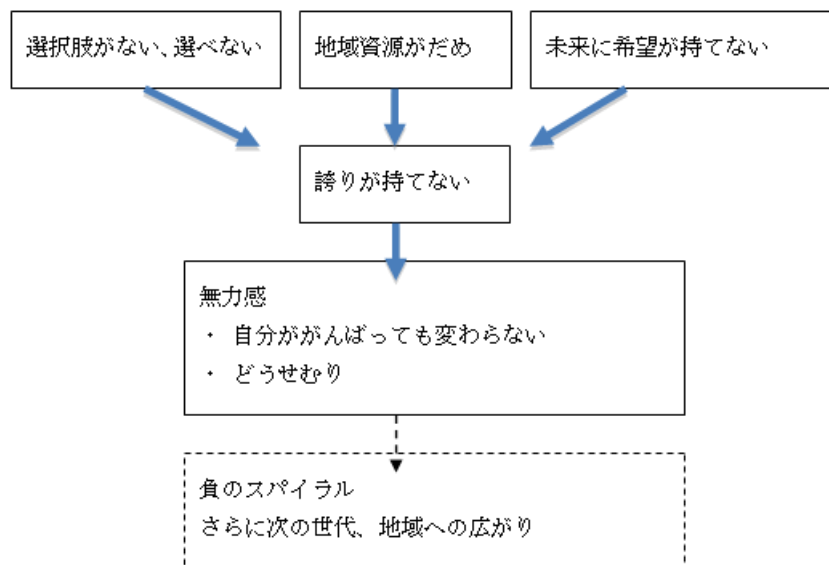
市的な思想が持ち込まれたことを述べた。その結果、地域社会のくらしや資源の豊かさを
 感じられなくなり、誇りを持たない状況が広がっていくプロセスを説明した。地域の中に
 共有されていたくらしのよさや思想、生き方に目が向かなくなり、地域に誇りを持たなく
 なったことが地域の諦め感につながっていったのではないだろうか。



〈図 4 諦め感醸成のプロセス〉

4-5 諦め感をもたらす影響

地域資源への諦め感、選択肢への諦め感、未来への諦め感が広がると、地域に対しての誇りを見いだせず、潜在的に存在する地域の魅力やネットワーク、地域の可能性が見えなくなってしまう。その結果、「自分の力ではどうにもならない」「何をやっても無駄だ」という無力感につながり、行動・挑戦し続けることができなくなる。そうした諦め感は世代を超えて伝播し、負のスパイラルを生み出す。



〈図 5 諦め感の影響〉

5章 諦め感を超えて

5-1 希望のジレンマの克服

希望学において、玄田らは、希望の再生に必要なものとして、「希望の共有」「アイデンティティの再構築」「地域内外のネットワーク」の3つを挙げている。ここで、この3つに沿って、今後の宿毛の在り方を考える上での手がかりを探したい。

1つ目の「希望の共有」に関しては、ヒアリングから見えてきたジレンマに注目する。希望学の釜石の調査で、西野が地域には二つのベクトルがあると指摘したように、宿毛にも諦め感の醸成の裏に、地域に存在する2つの希望が見えてくる。

1つ目は、「地域に残って、宿毛を盛り上げてほしい」という希望である。第1章で挙げたように、人口が減少すると地域での生活に様々な課題が生じる。宿毛でのアンケートでは、地域に希望を持たない理由として人口減を挙げている人が多く、「このままでは宿毛が好きでいられなくなる」という回答もあった。このことは、人口減少を食い止めることによって、生活課題の解消や文化の継承など宿毛の暮らしを守ることを望む声が多いことを示している。地域に残ることを選択する人が増えることによって、活気があって暮らしやすい地域になってほしい、という希望が宿毛内に存在する。

その一方で、「外にでて活躍してほしい」という希望も存在する。子ども世代に残ってほしいが、宿毛で生活していくための仕事や生活の保証ができない。親が地域に明るい展望を描くことができない。それならば外に出て幸せになってほしい、外で活躍して宿毛に還元してほしいという思いが生じる。宿毛は、条件不利な地域であるために情報や機会が少なく、早いタイミングで進路を決めなければならない。そのため環境に対する不利的な状況への危機感が強い。中学生の頃までにある程度周りからルールを敷かれ、リアルな将来像を描けないまま、外にでることを選択する人もいる。また、宿毛は過去に多くの偉人を輩出していることに自信を持っている。地域として人材の輩出への希望があり、小中学生は過去の偉人を外に出て活躍したモデルとして教えられる。

「外に出て活躍してほしい」という希望と「宿毛に残ってほしい」という希望はともに、地域の若者に対して向けられる地域の希望であるが、2つの希望の折り合いはつかない。そこで地域は、家庭環境、兄弟構成、家業の有無、学力などの要素を考慮し、2つの希望を若者に割り振っていく。若者に対して無意識的にルールを敷き、選択肢を諦めさせている。こうして地域の希望と個人の希望がマッチしない状況が存在する。

さらに、2つの希望の矛盾の延長線上に、宿毛に残った人と離れた人の分断がある。それぞれのとった進路によって、宿毛とのかかわり方は異なる。地域に残り、地域活動に取り組む人もいれば、都心で就職し宿毛との距離が遠くなる人もいる。どんな進路を選んでも宿毛に関わり続けられる状況をつくるべきである。そこでは、宿毛を出る、出ないという選択が問題にされるのではなく、両者が分断されてしまうことが問題であろう。両者がコミュニケーションを取り合えるネットワークを持ち続けることと、それを結びつける希望の共有が必要であろう。

5-2 宿毛らしさの再構築

中村は、釜石の調査における歴史文化調査の目的について「釜石に暮らす人々が自分たちの町の過去をどのように理解してきたのか、という問題を検討することを通して、今後の釜石における地域アイデンティティ形成を展望すること」であると述べ、「釜石の多様な歴史・文化を探ることは、前述した釜石地域における「希望の共有」というテーマを考える際に、重要なヒントを与えてくれる可能性を持っている」（中村，2008年，pp. ）と説明する。宿毛においても、共有される希望を考える上で、歴史的な積み重ねや文化がヒントになる。

幸いにも宿毛には、これまでの歴史や文化を記録しておこうという動きがある。市内の歴史資料館には、江戸時代の頃の宿毛のまちなみのレプリカや宿毛から出土したものが展示されている。また、町の中にも、歴史的な建造物が壊されずに残っている。郷土教育にも力を入れており、宿毛の偉人21人の成り立ちや功績について、小中学生は勉強する。歴史資料館を訪れると、歴代の藩主が、教育に力を入れていたこともわかり、多くの偉人を輩出してきた背景を感じる。

過去に輩出した偉人とのつながりは今でも強い。早稲田大学の建学に携わった小野梓の存在は、近年になって宿毛で知られるようになり、現在は毎年3月に梓立祭が行われている。その時には、同じく宿毛の出身である竹内明太郎が創業したコマツの関係者や、坂本嘉治馬がつくった富山房の関係者も足を運ぶ。彼らが今でも、宿毛にエールを送り続けていることは、とても大きな意味があるだろう。

しかし一方で、偉人が地域を離れて活躍したというストーリーは、現在の子どものためのモデルにはなりにくい。宿毛に住んでいる人も、知識として知ってはいても、生活の中には意識されていない。宿毛のアイデンティティをとらえる上では、偉人に目をむけるだけでは不十分である。歴史的に、偉人を多く輩出してきたことは宿毛の一面であるが、それと同時期、もしくはそれよりも長い時間をかけて宿毛に残って、宿毛のくらしや文化を守り続けてきた人や生活にも目を向けるべきであろう。宿毛の暮らしは、過去の積み重ねの上に成り立っている。地元の漁師や、高齢者に話を伺うと、昔の出来事や自然との向き合い方、生活の知恵がたくさん眠っていることに気付く。宿毛はもともと2町4村が合併してできているという経緯もあり、集落ごとの文化が残っている。分かりやすい例がお祭りであろう。3章で取り上げたように、漁業がさかんな集落では、現在もお祭りが行われている。

お祭りの例だけを見ても、自然と向き合い、文化を伝承してきた様子が見て取れる。他にも食や料理の工夫などもその一つである。こうしたくらしや風習、景色が共有され、そこに文化が育まれていく。さらにそこには、生き方や思想、哲学がうまれる。表面的に、「宿毛にはなにもない」と感じられても、そこには地域に共有されているアイデンティティがある（あった）のではないだろうか。

歴史を知識として知るだけでなく、経験として感じるのが、地域のアイデンティティ

の再構築に向けては大きな意味を持つだろう。産業の担い手の高齢化、人口減少によるお祭りの実現のむずかしさなどから、地域のくらしは見えにくくなっている。そうした中でも、長い時間をかけて作られてきた生活の基盤やそこに紐づく文化や思想を感じられる工夫をしていくべきであろう。宿毛での生き方のロールモデルを見えるようにすることで、子どもの選択肢の幅も広がり、また地域への愛着や誇りにもつながるだろう。

5-3 地域内外のネットワークの活用

5-1 では分断を解消し、どのような選択肢をとっても宿毛に関わり続けられることが、地域への諦め感の克服につながると述べた。そうした状況をつくるためにも、地域内外のネットワークを活用することが重要だ。

宿毛には、多くの潜在的なネットワークが存在している。その一つに東京すくも会という団体がある。東京に住んでいる宿毛出身者が都内で集まり、宿毛に関する講演会や同窓会などを行っている。回によっては、宿毛在住の人も参加して、交流を深めている。また、東京宿毛会が発行している『土佐すくも人』には、宿毛の市勢や、偉人の功績、宿毛での思い出が掲載されている。このように、地域を離れた人が集まり、宿毛について話をする機会があることは宿毛のことを気にかけている存在を表している。

また宿毛は、多くの偉人を輩出しており、彼らが立ち上げた組織や、子孫とのつながりが大切にされている。例えば、憲法草案の作成、東洋書館の創業、早稲田大学の建学などに携わって功績を残した小野梓は、宿毛出身である。近年になって、宿毛でその功績が知られるようになった。早稲田大学との交流が続いており、毎年 3 月に行われている梓立祭には、早稲田大学の総長や関係者も多数出席している。

小野梓が立ち上げた東洋書館ののち、富山房という出版社を築いたのは、坂本嘉治馬である。坂本嘉治馬は、小野梓を頼って上京して東洋書館を手伝い、富山房を軌道に乗せる。富山房を訪れると、坂本嘉治馬に関わる書籍や写真、新聞などがたくさん残されている。坂本嘉治馬は、宿毛出身の偉人の中でも特に、故郷である宿毛の活性化に尽くした人であると知られる。宿毛高校の設立や橋の改修工事、坂本図書館など、多くの場面に支援をした。坂本嘉治馬が宿毛へいっていた思想は今も受け継がれている。坂本嘉治馬の子孫にあたる、現在の富山房の会長夫妻は、毎年宿毛を訪問し、地元の小中学生の作文コンクールの表彰に駆けつける。本の寄贈なども行っている。

最後にコマツの創立者である竹内明太郎も、宿毛出身である。株式会社コマツとのつながりも深く、現在は宿毛の高校から毎年何名かコマツへ入社している。

偉人の縁がきっかけになったつながりもまた、なにかあった時に支えとなり、実際に宿毛に対して選択肢を増やしたり、歴史的な背景を感じるきっかけをつくったりしている。このように宿毛に携わるネットワークは潜在的に存在している。こうしたネットワークを活用していくことが重要だ。

そのためにはまず、人々がそうしたネットワークの存在を知ることが必要だ。地域に残

った人も離れた人も、自分一人では何もできないという無力感を持ってしまうかもしれない。特に近年は、地域内においても個人化やつながりの希薄化が進行している。無力感を抱く前に、一緒に活動できる仲間が存在に気付くためには、ネットワークをオープン、かつアクセスしやすいようにすることが求められる。そこでは、ネットワークを金銭面だけでなく、情報やアイデア、機会などと広く捉えて活かし方を考える必要があるだろう。さらに、ただ知り合うだけでなく、相互作用を生み出せるつながりにしていくことが重要だ。宿毛でのヒアリングの中で、上の世代からの圧力が強いという話があったが、そうではなく、異なる立場に置かれている人が互いに意見を出し合い、尊重しあうことが重要だ。そのためには希望やアイデンティティの共有が求められる。そのうえで、それぞれの知見から宿毛の今後のためにできることを考え、新たな活動の展開につなげていくべきであろう。また、そうした様子を見て、どうせ変わらないからやらない、という雰囲気から、どうせなら挑戦してみようという空気になるかもしれない。

こうした工夫を重ねることで、選択肢の拡大、宿毛の良さの発見、新たな活動の展開などが望める。これに加えて、宿毛に観光で訪れた人に対して、表面的な景色だけでなく、そこに根付く文化を伝えたり特産品などの商品を通して宿毛を発信したりする取り組みも行うべきであろう。そうすることで、宿毛出身ではなくても、地域のアイデンティティや希望を共有することはできるかもしれない。諦める前に、潜在的に存在するネットワークを活用し、かつ新しいネットワークを形成していくことが求められる。

諦め感が先行すると、潜在的な魅力やネットワークが見えなくなりがちである。地域が持っている資源やネットワークを冷静に見つめて明らかにしたうえで、それを活かす方法を考え、地域内外のネットワークを駆使して実践していくことが重要だろう。地域が行動と挑戦を続けられるようにすることが、諦め感とうまく付き合い、その地域にあったあり方を目指していくための第一歩である。

終章

1 〈まとめフロー図〉

はじめに

- ・地域には諦め感が渦巻いているのではないか。諦め感とはなにか、その醸成のプロセス、影響を明らかにし、諦め感とうまく付き合うためのヒントを模索する。

第1章 地域の諸課題と社会背景

- ・戦後の地域社会の変容
- ・過疎化の進行による諸課題
- ・地域の誇りやアイデンティティへの関心

第2章 希望学

- ・個人と地域をつなぐ希望学
- ・地域の希望と個人の希望のギャップ
- ・地域再生のてがかり

第3章 宿毛

- ・宿毛の概要…地理、歴史、現状（過疎化、生活課題など）
- ・アンケート結果
- ・ヒアリング

第4章 宿毛における諦め感

1 地域資源への諦め感

- ・条件不利地域
- ・資源、機会

→豊かさを感じられない

2 選択肢への諦め感

- ・選択肢が少ない
- ・選べない

→ネットワークの分断

3 未来への諦め感

- ・一次産業の閉塞感
- ・失敗の経験

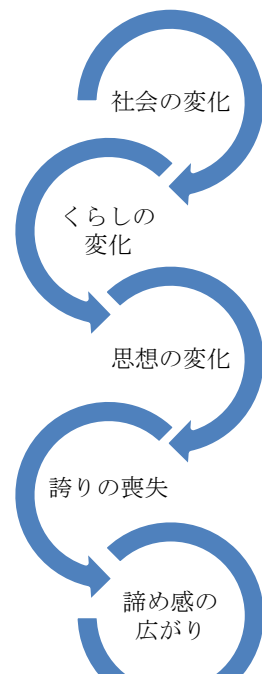
→明るい未来×



4-5 無力感…リスクを負ってまで挑戦し続けられない

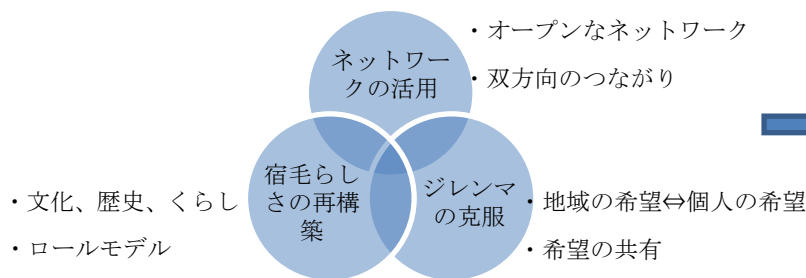


過疎化の加速、生活課題、文化の消滅



4-4 諦め感醸成のプロセス

第5章 諦め感を超えて



次の地域の在り方を前向きに考え、行動し続ける。
→新たな一歩へ。

おわりに

- ・地域の諦め感の構図を明らかにした。今後の地域社会の在り方を考えるヒントになったら幸いだ。

2 本論文の到達点と意義

本論文では、諦め感に注目することで、地域社会に起きている変化や課題の根本に迫ろうと試みた。高知県宿毛市におけるアンケートとヒアリングをもとに、住民意識に重きを置きつつ、その裏側にある社会背景の分析に努めた。結果として、地域資源への諦め感、選択肢への諦め感、未来への諦め感の3つに類型化することができた。また、こうした諦め感の背景には、社会の変化とそれによる地域の思想の変化があり、地域に誇りが持てなくなっている状況があることを述べた。さらに諦め感が次の世代へと受け継がれていってしまうことを説明した。今回は、アンケート・ヒアリングともに数が少なく、範囲も限られていたが、地域住民の意識の広がり注目することは今後の地域社会の在り方を考えるうえでのヒントになるのではないだろうか。

さらに、本論文では今後の地域を考えるヒントとして、希望学で提唱された「希望の共有」「地域のローカル・アイデンティティの再構築」「ネットワークの形成」を手がかりに、諦め感とうまく付き合い、よりよい地域を考えていくことができる基盤をつくるために以下の3点を挙げた。1つ目は「希望のジレンマの克服と共有」であり、地域に希望の分断が起きていることの解消が、諦め感を超える一歩につながると述べた。2つ目に「宿毛らしさの再構築」を挙げ、宿毛でのくらしや生き方のロールモデルに目を向けていくことで、誇りを持てる地域を目指していけるとともに、異なる立場の人が一緒に活動するための指針になっていくだろう。3点目は、「ネットワークの活用」である。宿毛に潜在的に存在するネットワークをうまく活用していくことが、宿毛の今後に関わってくるだろう。特に、双方向的なやりとりのできる場をつくることで、地域が抱える課題の解決のための基盤となるだろう。

本論文では宿毛に焦点をあて、地域の諦め感について論じ、今後のヒントを探した。現在、過疎化や少子高齢化に伴う課題を抱える地域は日本全国に存在する。地域が異なれば、課題や持ち味は異なる。しかし、その根本にある地域の意識の中には、宿毛で考えた諦め感とおなじような意識があることだろう。この論文が、諦め感とうまく付き合い、地域を考えていくときのヒントになったら幸いである。

謝辞

筆者は1年生の時から宿毛に通い、様々な経験をさせていただいた。卒業論文を書くにあたって、1番に思い浮かべたのは宿毛のことであり、執筆中も悩んだ時は宿毛で感じたことに立ち返った。この論文では、地域の課題に迫るために宿毛を取り上げて、諦め感について論じたが、宿毛の人がみんな諦めているわけではない。日々の暮らしに誇りを持ち、訪れた観光客に伝えている方や自分が育った景色を子どもたちの世代に残そうと活動する方など、地域の諦め感を感じながらも、希望を持ち、行動し続けている人もたくさんいらっしゃった。宿毛の自然と向き合い、歴史や文化をつないでいく。宿毛に生まれ育ったことを誇りに思い、行動を続けている人はとてもあたたかく、すてきだ。

ただ、そうした生き方や宿毛の魅力が共有されているわけではないということは感じている。例えば宿毛の小中学生は、宿毛でカッコいい生き方をしている人を知ることすら限られている。宿毛の歴史や文化、偉人を輩出したという事実を知識として知るだけでなく、実感をもって理解され、宿毛の生き方に誇りを持てるような宿毛であってほしい、と感じる。

また、論文を書きながら、地域の中に暮らしている人だけでなく、地域を離れた人や外部の人が、地域の良さや課題、今後のあり方のイメージを共有していくことが大切だと改めて思った。置かれている立場やできることは異なるが、一緒に議論し活動していくことで、新しい動きが生まれ、諦め感を打破するきっかけになるかもしれない。個人的なことになるが、筆者は、卒業後もなんらかの形で宿毛には関わり続けたいと考えている。大学との関係も深い宿毛という地域を、外から一緒に考えるメンバーの一人になれば幸いである。

最後になるが、アンケートやヒアリングにご協力いただいた方、10月のスカイプ会議に参加してくださった方、さらには3年間で出会った宿毛のみなさんには本当にお世話になった。

本当にありがとうございました。

参考文献

- 宇野重規「社会科学において希望を語るとは—社会と個人の新たな結節点—」, 東大社研・
 玄田有史・宇野重規編『希望学 1 希望を語る—社会科学の新たな地平へ—』東京大
 学出版会, 2009 年
- 大久保武「地域開発政策と農村の変容」, 岩崎信彦・矢澤澄子監修『地域社会学講座 3 地
 域社会の政策とガバナンス』, 東信堂, 2006 年
- 大久保武・中西典子編『地域社会へのまなざし—いま問われているもの—』2006 年, 株式
 会社文化書房博文社
- 小田切徳美『農山村再生 「限界集落」問題を越えて』, 岩波書店, 2009 年
- 小田切徳美『農山村は消滅しない』, 岩波書店, 2014 年
- 小内透「地域社会の編成と再編 - リージョンとコミュニティのマクロの構造 - 」, 似田貝香
 門監修『地域社会学講座 1 地域社会学の視座と方法』, 東信堂, 2006 年
- 玄田有史「データが語る日本の希望 - 可能性、関係性、物語性 - 」, 東大社研・玄田有史・
 宇野重規編『希望学 1 希望を語る—社会科学の新たな地平へ—』東京大学出版会,
 2009 年
- 高橋勇悦・大坪省三『社会変動と地域社会の展開』2000 年, 学文社
- 白石絢也「中山間地域と島嶼地域における『地域力』の構造分析」, 島根大学『社会文化論
 集: 島根大学法文学部紀要社会文化学科編 9』, 2013 年
- 下平尾勲『地元学のすすめ—地域再生の王道は足元にあり—』,
 株式会社新評論, 2006 年
- 宿毛市ホームページ <http://www.city.sukumo.kochi.jp/> (2016 年 1 月 15 日最終閲覧)
- 宿毛市史編纂委員会編『宿毛市史』, 1997 年, 宿毛市教育委員会
- 辻正二「農山村—過疎化と高齢化の波—」山本努・辻正二・稲月正『現代の社会学的解読』,
 2006 年, 学文社
- 竹村祥子ほか「地域の希望を考える—希望学釜石調査座談会の記録—」東大社研・玄田有
 史・中村尚史編『希望学 3 希望をつなぐ—釜石からみた地域社会の未来—』東京大
 学出版会, 2009 年
- 東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトホームページ
 <http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope/outline.html> (2015 年 11 月 25 日最終閲覧)
- 東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学 3 希望をつなぐ—釜石からみた地域社会の未来
 —』東京大学出版会, 2009 年
- 永井暁子「同窓会調査の概要とその重要性」東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学 3
 希望をつなぐ—釜石からみた地域社会の未来—』東京大学出版会, 2009 年
- 中村尚史「地方の希望—希望学・釜石調査の概要—」, 東京大学『社会科学研究 59(2)』, 11-33,
 2008 年, 東京大学

西野淑美「釜石市出身者の地域移動とライフコースー釜石を離れる・釜石に残るー」, 東大
社研・玄田有史・中村尚史編『希望学 3 希望をつなぐー釜石からみた地域社会の未
来ー』東京大学出版会, 2009 年

矢木伸欣「土佐 宿毛の伝統行事」, 東京宿毛会『土佐すくも人第 28 号』, 2012 年, 三元社
結城登美雄『シリーズ地域再生 1 地元学からの出発ーこの土地を生きる人びとの声に耳
を傾けるー』農山漁村文化協会, 2009 年

吉野英岐「戦後日本の地域政策」, 岩崎信彦・矢澤澄子監修『地域社会学講座 3 地域社会
の政策とガバナンス』, 東信堂, 2006 年